

No.2902

「20 世紀前半インドネシアにおけるイスラーム諸団体の連携と対植民地政府活動」

早稲田大学 文学研究科博士課程

土佐林 慶太

本研究は、1920 年代から 40 年代のインドネシアにおけるムスリム勢力の団結運動と、それらを主導したスラバヤ出身のウラマーであるマス・マンスールに着目し、当地のムスリムと「インドネシア」を結ぶ紐帯として、こうした運動が果たした役割を示し、インドネシア・ナショナリズム運動史において植民地期末期のムスリム運動とそれを率いたマンスールの貢献を位置付けることを目的とする。

研究手法としては、20 世紀前半から中葉に発行されたインドネシア語、ジャワ語、オランダ語の一次資料を取り扱う。それらを収集するために、3 回のオランダ調査と 2 回のインドネシア調査を本助成で行った。オランダでは、オランダ国立公文書館において、植民地政庁とオランダ本国の交信文書であるメール・ラポルトを中心に調査を進めた。インドネシアでは、インドネシア国立図書館を中心に、当時インドネシアで発行された『ウトゥサン・ヒンディア』や『スアラ・ウムウム』などの定期刊行物の収集を行った。

これらの調査を通して明らかになったことは、主に以下の三点である。第一に、インドネシア独立後にムスリムの社会進出が進められた背景として、オランダ植民地期のムスリム団結運動の重要性である。第二に、上述の団結運動が常に海外ムスリムの動向と連動して進められ、インドネシア・ムスリムという意識を覚醒させ、インドネシアという枠組の形成においても、決して小さくはない役割を果たしたということである。第三に、マンスールは、1910 年代後半からの活動で得た人的・地域的な結びつきによって、団結運動の先導者となり得たということである。これらの成果の一部は、全国学会である東南アジア学会第 98 回研究大会（神田外語大学）における個人研究発表（題目：ミアイによるメッカ居住者帰国事業と政治参加）や、『20 世紀前半インドネシアのイスラーム運動-ミアイとインドネシア・ムスリムの連携-』（風響社、2017 年）で公表した。